

地域発! 現場検証シリーズ

持続的競争力研究会

株式会社鈴善

代表取締役会長 鈴木 勝健

□所在地 福島県会津若松市中央1-3-28

□創業 天保3年(1832年)

□URL <https://suzuzen.com>

□事業種目 漆器販売業

□TEL : 0242-22-0680

新たなニーズ探る

ハイテク技術も

取り入れ

会津塗の産業としての歴史は、1590年に蒲生氏郷氏が会津に入封した時に遡る。蒲生氏郷氏が近江から木地師と塗師を招き最先端の技術を伝授し、領国経済確立のため産業政策として保護、育成した。江戸時代には歴代藩主の保護奨励策により一大産地となった。原料の漆の木は、実がロウソクの原料になることから、年間20万本の植栽が続けられ江戸中期には180万本を数え、幕末には海外に輸出されるほどまでに成長した。幕末の戊辰戦争で壊滅的な打撃を受けたが、その後、明治時代中期には国内有数の漆器産地として復興した。



▲鈴善の蔵建造物群＝「会津塗伝承館」

鈴善は江戸時代後期の1832年、初代鈴木善九郎氏が創業した約200年続く老舗企業。会津藩から株仲間の許可を得、江戸住み仲間（塗物問屋）として事業の礎を築き、会津漆器を全国に広めていった。明治時代には輸出も手掛け、海外市場へも進出を果たしている。

「戊辰戦争では官軍にすっかりやられました。仲間組織がしっかりしていたので、職人達を少しずつ集めて復興させたのが会津漆器です」（鈴木勝健代表取締役会長）。

地場産業への成長と衰退

会津漆器は大きく分けてお椀などの丸物とお盆などの板物に分かれる。優美な意匠と堅牢な品質により会津を代表する地場産業へ成長した。会津漆器の特徴は、問屋を頂点とした分業体制に見られる。問屋ごとに木地業（板物、丸物）、塗業（板物、丸物）、加飾業が傘下に収まり、分業体制が発達していた。この体制は量産に対応できる画期的な仕組みであったが、生産量が少なくなると、個々の分業を担当する職人の生活が維持できないという弱点が顕在化し、後年衰退する要因となってしまった。

明治時代には漆器は、会津、静岡、紀州黒江が先進的産地で中期まで堅調な輸出での伸びを示した。しかし、その後は次第に減少傾向を示した。

とはいえ、漆器需要の減少を見据えて、比較的早い時期にさまざまな対策を講じていた。既に先々代（4代目）において、木工技術を活用するため漆器と並んで、着物をかけておく漆塗りの家具「衣桁」の生産を手掛けるなど、木工工程を機械化して、家具へと事業を多角化している。

また、昭和に入り、ベークライトを用いたプラスチック素地の漆器の可能性を追求して、戦時中には飛行機の製造にも取り組み、戦後、カシューナツツの木から取れる植物性塗料（カシュー漆）の採用とともに、樹脂製素地の漆器生産にも道を開いた。この他、先代（5代目）は自動車教習所に参入し、ボウリング場やバッティングセンターの経営に取り組むなど、多様な副業を営むことで企業維持を図ってきた。



▲会津塗食器

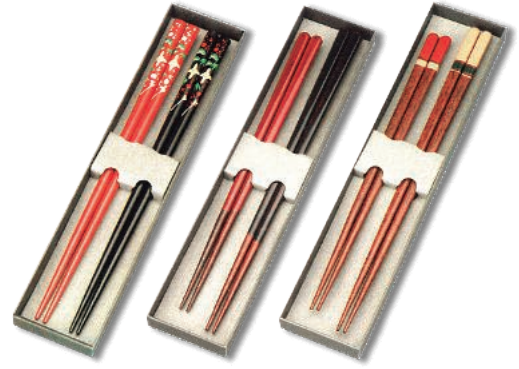
会津塗伝承館で新たな道を

当代の鈴木会長も、販路開拓や多角化などによって伝統産業の維持を試みたものの、業界の衰退は避けられず、卸問屋としての事業からは撤退を決断した。会津若松市の漆器業では、他の伝統的工芸品と同様、近年衰退傾向が続いており2013年の年間出荷額は16億円と1978年の約3分の1に減少。事業所数では736から32まで減少している。1978年当時は法人組織が60事業所で大半が家族経営だったことを考慮しても、厳しい経営環境により転廃業が促されたことが推測される。

令和に入り、「会津塗伝承館」を開設。会津地方が培ってきた伝統的な産業としての漆器に新たな意味を付加し、会津漆器の価値、会津の塗物文化・モノづくりを伝承させるべく挑戦を続けている。

同館は国登録有形文化財に認定された7棟の建物を有効活用し、内6棟を一般公開し、「ギャラリー（美術蔵）」、「蒔絵体験（体験蔵）」、「会津漆器販売（漆器蔵）」、「飲食（蔵の茶屋）」などを配している。開設の目的は「後世に会津塗を伝えていくため」としているが、鈴木会長は「自分達の今までの仕事を見てもらって、一般の方に知ってもらいたい。お礼だと思っている」と語る。

観光客を中心に情報を発信し始めているのが現状であるが、展示物には芸術性の高い作品が多数含まれ、伝統産業の奥深さを伝えている。一般的な観光施設として会津の歴史や名産品を紹介している施設があるが、展示品の芸術的価値は類を見ないものになっている。また、企画展として福島県伊達郡川俣町出身の漆芸家「関谷浩二」の作品展に注力するなど、伝統技術の継承者へ向ける眼差しは温かい。まさに、会津漆器の新たな情報発信基地となっている。



▲塗り箸「かけはしや」



▲南蛮タンス



▲照明（こもれび）



▲蒔絵体験

多角化で成長めざす

伝統的な漆器のお椀の特徴は、素材が木であるため約80度のお湯を注いでも手に触れる部分は約40度以下になることにある。プラスチック製の場合は、50~60度になり体感温度の限度を超え「熱い！」という感覚が生じる。こうしたメリットがある一方で、テーブルの上から落下した場合、木のお椀は当たり所が悪ければ、割れる場合があるが、プラスチック製の場合は割れることはない。戦後の生活様式の変化により、畳に座って食事するスタイルからテーブルへと変わり、需要が減少したとしても、食事を楽しむといった本質的なニーズを考慮して、漆器が持つ本質的な機能や質感に目を向けた挑戦も試みられている。

実際、素材としての漆製品の技術開発はハイテクプラザ会津若松技術支援センターの協力を得、約3年間かけて「布胎漆器（ふたいしっき）」（固まる漆を布に塗っても曲げることができ、割れや剥離、ヒビなどが入らない布）を完成させた。漆器の弱点を克服しようとの動きである。消費者ニーズを意識した取り組みが求められるが、既成概念にとらわれない新たな用途の開拓と素材としての漆製品の技術開発を通じた新たなニーズへの対応は可能であろう。すでにデザイン性の高い漆器酒器や漆器カップなどもあるが、さらに温かいラーメンを器とともに楽しむラーメン用漆器など、会津漆器の新たな用途を提案することで、市場開拓は可能である。

同館でもすでにアクセサリや名刺入れ、ブックカバー、御朱印帳を販売し、好評を得ており、用途拡大の道を歩み始めている。鈴木会長は「布に柔軟剤を入れた漆を塗って、柔らかくして何か



▲名刺入れ



▲カード入れ

やろうかと考えている」と、会津人らしく飾らず控えめに話している。これまで、問屋は作り手の頂点に立ち会津漆器を牽引してきたが、大量生産を支えた分業体制は衰退している。問屋にも売り手機能が求められており、企画から試作品作りまで自社で行い、製作工程をプロデュースするなど、事業の再構築を模索しているが、明確な答えは見えていない。それでも、伝統的工芸品の守り手としての矜持を持ち、「会津塗伝承館」という場を設け、新たなニーズに対応すべく動き出している。

聞き手・執筆者

神田 良（かんだ まこと）

日本生産性本部 生産性新聞 編集委員

明治学院大学 名誉教授

RIMS 日本支部 支部長

黒田昭弘（くろだ あきひろ）

とうほう地域総合研究所編集長 兼 研究員

「地域発！現場検証シリーズ」は、公益財団法人日本生産性本部との共同取材企画です。なお、生産性新聞の掲載内容と一部表現が異なります。